

話題に対する共感度と批判的発言選択の関係

沖林 洋平（広島大学大学院教育学研究科）

問 題

本研究では、会話における批判的発言選択に影響を及ぼす要因を検討する。なお、本研究における批判的発言とは、過度の一般化を指摘する発言を指す。

我々は、会話状況において、思い浮かんだ発言内容をそのまま発言したり、差し控えたりする。このうち、発言を差し控える行動は、発言抑制行動(畑中, 2003, 2006)と呼ばれている。発言抑制や発言行動に至る意思決定過程を検討した研究として、畑中(2003, 2006 など)や田中(2005)が挙げられる。畑中(2003, 2006)は、発言抑制に至る意思決定に適切性判断、否定的思考、スキル欠如が、相互関連的に影響を及ぼすことを明らかにした。しかし、それらの生起順序の検討は検討されていない。田中(2005)は、3名の会話場面における被験者の発言に関する多肢選択課題を開発し、批判的発言と会話の目的との関係について検討した。その結果、目的が楽しむことである場合、発言選択率は低く、過度の一般化の指摘が目的である場合、批判的発言選択率は高かった。すなわち、批判的発言選択に会話の文脈の認識が関係することが示された。このような、文脈を的確に把握し適切な行動を選択する過程はモニタリング(e.g. Halpern, 1998)である。田中(2005)の手続きでは、発言選択に至る内的過程に関して測定していなかったため、選択されなかった場合でも、批判的発言が想起されていた可能性については否定できない。これに関しては、想起した批判的発言に他者の共感が得られないと予測した結果、リスク回避のために批判的発言選択が抑制された考察している。以上のように、想起された批判的発言の使用、抑制にはモニタリングやリスク認知が影響を及ぼすと考えられる。

畑中(2003・2006)や田中(2005)の知見からは、想起した発言内容の発言に対する他者の反応がコミュニケーションにおけるリスクとなり、リスク回避のために発言抑制行動が表出するという発言に至るまでのモデルを仮定することができる。本研究の目的のひとつは、このモデルを検証することである。

本研究のもうひとつの目的は、批判的発言を促す要因の検討である。本研究で仮定するモデルに基づくと、

想起した発言に対するリスクを低減することができれば、楽しむ目的においてリスクの高い批判的発言を促すことができると考えられる。本研究では、発言に対する他者からの共感(承認)あるいは非共感(拒否)が発言に対するリスクを変動させると仮定する。

実 験 1

目 的

実験 1 では発言に対する共感度と他者の反応が批判的発言選択に及ぼす影響について検討した。

方 法

分析対象者 大学生 310 名が分析対象者であった。

材料 1. 発言選択課題(Appendix) A, B, C の 3 名による 2 つの話題の会話により構成され、「共感重視文」「論理性重視文」「他者理解文」の 3 種類を作成した。被験者は、3 つのうち 1 つを読んだ。

予 測 実験 1 では次の結果を予測する。共感重視条件における共感度は低く、発言に対して共感が得られるため同様の場面における批判的発言選択率は低い(予測 1)。論理性重視条件における共感度は高いが、発言に対する他者の反応が非共感的であるため、同様

Table1 実験 1 共感重視条件における話題 1 の C の発言に対する共感と批判的発言の有無

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	12	13
	なし	16	72

Table2 実験 1 論理性重視条件における話題 1 の C の発言に対する共感と批判的発言の有無

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	10	65
	なし	14	13

Table3 実験 1 他者理解条件における話題 1 の C の発言に対する共感と批判的発言の有無

		批判的発言	
		あり	なし
共感	あり	32	35
	なし	12	16

の場面における批判的発言選択率は低い(予測 2)。他者理解条件における共感度は高く、発言に対する他者の反応が共感的であるため、同様の場面における批判的発言選択率が高い(予測 3)。

結果と考察

話題 1Cの発言に対する共感と話題 2 における批判的発言選択の有無 Table1, 2, 3 に実験 1 の各条件における話題 1 でのCの発言に対する共感と話題 2 の批判的発言選択の有無を示した。 χ^2 二乗検定の結果、共感重視条件では($\chi^2(1)=9.29, p<.05$)、論理性重視条件では($\chi^2(1)=16.3, p<.05$)と有意であった。他者理解条件では($\chi^2(1)=0.191, n.s.$)と有意ではなかった。

実験 1 の結果、予測 1, 2 が支持された。しかし、他者理解条件では、条件間の発言選択率に有意差はなかった(Table3)。論理性重視条件と他者理解条件の違いは、A, B の反応のみであった。すなわち、他者反応の認知によって、リスク変動に個人差があることが示唆された。

実験 2

実験 2 では、他者理解条件において、批判的発言の選択の有無に影響を及ぼす過程として、他者の共感的な反応に対する認知の違いを検討した。会話場面における発言選択を社会的状況における個人の行動であると位置づけ、社会的状況での反応の個人差を説明する要因としてセルフ・モニタリングの影響を検討した。

方法

分析対象者 大学生 196 名が分析対象者であった。

材料 1.発言選択課題 他者理解文のみ。2.セルフ・モニタリング尺度(岩淵・田中・中里, 1982)「外向性(外的・社会的な関心の強さ)」「演技性(演技して他者を喜ばせる志向性)」「他者志向性(他者のために自己を抑える志向性)」の 3 因子で構成される

予測 「演技性」「他者志向性」得点は、批判的発言無群が有群よりも高い(予測 4)。

結果と考察

Table4 に批判的発言選択の有無によるセルフ・モニタリング得点を示した。批判的発言(有・無 ; 2, 被験

Table4 実験 2 セルフ・モニタリングと批判的発言選択の有無の関係

批判的 発言		セルフ・モニタリング					
		外向性		他者志向性		演技性	
あり (N=112)	あり	3.65	(0.42)	3.13	(0.64)	3.26	(0.47)
	なし	3.01	(0.36)	3.71	(0.52)	3.87	(0.81)
なし (N=84)							

者間)×セルフ・モニタリング(3 因子 ; 3, 被験者内)の 2 要因分散分析を行った。交互作用が有意であった($F(2.388)=545.31, p<.01$)ため下位検定を行った結果、他者志向性、演技性因子は、発言無群が有群より高く($F(1.582)=713.74, p<.01$; $F(1.582)=752.33, p<.01$)、外向性因子は、批判的発言有群が無群よりも有意に高かった($F(1.582)=722.86, p<.01$)。実験 2 の結果、批判的発言無群の他者志向性、演技性得点は、批判的発言有群よりも高いことが確認された(予測 4 を支持)。

総合考察

2 つの実験を総合すると、批判的発言選択に至る過程を次のように仮定できる。まず、会話への参入による発言内容の想起である。次に、モニタリングなどに基づく会話の文脈の認識とリスク認知に基づく他者の反応の推測である。最終的な発言選択には、同様の経験の回想がリスク認知に影響を及ぼす。その際、個人的特性によってリスク変動に個人差が生じる。

Appendix 本研究で用いた発言選択課題の概要

話題 1

C は、授業が終わって、友達のア、B と教室から出てきた。
A「あの道、雨が降った日の夜通ると幽霊が見えるって雑誌に紹介されてたんだ。私は幽霊とか大好きなんだけど、今週は雨が続きそうだから、私にも幽霊が見えるかな。」
B「あの雑誌が紹介する別の心霊スポットに行った私の友達も、幽霊を見たって言ってたよ。A さんにも幽霊が見えるかも。」
(共感重視)
C「もしかしたら A さんにも見えるかもね。」
(論理性重視), (他者理解)
C「雑誌で紹介してたからって必ず見えるとは限らない。」
問 1 文脈認識の確認
問 2 共感度を 5 段階で評定
他者反応
(共感重視) →その場はとても盛り上がりました。
(論理性重視) →A さん、B さんは押し黙ってしまいました。
(他者理解) →A さん、B さんは、C の発言に納得しました。

話題 2

テレビのラッキー占いが話題。発話の構造は話題 1 と同じ。
問 3 あなたが C であれば、どのような発言をしますか。最も当てはまる数字を 1 つ○で囲んでください。
1. あの番組の占いが必ず当たると言い切れないよね
2. 私も明日見てみようかな
3. もしかしたら A さんにも運命の出会いがあるかもよ
4. 2 人の結果だけで判断していいのかな

